

# 柳原英日記（下）

—二十世紀初頭の第三高等学校と三高生—

田中 智子†

本誌第4号（2006年3月）において、第三高等学校三年次在籍生徒、柳原英の日記前半部を素材に、当時の三高および三高生の実態を検討した。本稿はその続編であり、同日記の後半部を取り扱うものである。期間は1907（明治40）年12月1日から1908（明治41）年4月19日までである（日記がこの日で突然終わってしまうこと理由は、ひとえに日記帳の頁が尽きたことにあると思われる、帳面を改めて書き継がれた可能性も高いが、残存していない）。

日記本文の紹介に先立ち、前回とり扱った問題も含めながら、叙述の内容やスタイルについて総合的考察を試みたい。

### 学生生活

柳原の学生生活について前稿で指摘した点は、今回の翻刻部分からも読み取ることができる。すなわち、①実験中心の学業②休講の多さ③大学進学への意識④拘束力の少ない寮生活⑤同級生との日課的散歩や折々のレクリエーション⑥故郷にある同世代の親類との連帯⑦演説会への参加⑧運動競技への関心、といった諸点である。以下、具体的な記載事項に触れていこう。

学業に関しては、定期試験に対するプレッシャーが感じられる（12.11～23、3.18～30）。これ

は以前述べたように、在学中の成績が希望する大学への進学可否に関わる可能性があるからだろう。また、体操の授業への言及の多さも目をひき、例えば分列式（2.11）や日吉山での実射訓練（3.10）など、後に軍事教練と称される演習の様相も描かれる。だが日常的には、相変わらず教員の休講が多く、遅刻やいわゆるエスケープも行われ（1.23、2.12）、空き時間はいつもテニスに興じるなど、学業にあくせくしないのんびりとした生活の様子が伝わってくる。

寄宿舎では「茶話会」などと称する大小の会合、遠足や「胆力養成」すなわち肝試しなどのイベントがしばしば企画されている。散歩の際には、寺町や三条で買い物をして祇園・円山公園を回り、行楽地として整いつつあった岡崎一帯を訪れるのが定番であった。ここで柳原は自転車競走を見物し（1.19）、カンガルーや象が新来した動物園（1903年完成）を見学（3.23）、平安神宮での韓国皇太子歓迎式に足を運んだりもしている（12.12）。なお自転車は、郷里の広島県でもすでに日常の足として使用されていたようだ（1.3）。

課外の学びの場といえる演説会にしばしば参加する柳原であるが、注目されるのは京都帝国大学図書館で開催された記念講演会である（4.1～4.2）。村岡範為馳・末広重雄・和辻哲郎・狩野直

†（財）三高自昭会・三高記念室員

喜といった各分科大学の教授陣が講壇に立つ一方、開放された学内で実験や展示の公開が行われており、現在でいうところのオープンキャンパスの様相を呈している。居合わせた大学生に質問を浴びせるなど理科系の陳列品に強い関心を寄せる柳原であるが、文科系方面の講演に対しては、自分に向いていないとの自覚を得ている。ただし心理学には関心があり、大学が開始した学生修養特別講義（松本亦太郎教授）へ足を運んだ（4.17）。その他の講演会としては、三高演説討論部主催の演説会があり（2.15。『嶽水会雑誌』第39号〔1908年3月〕に詳報掲載）、京都帝大法科の神戸正雄教授「欧米雜観」から強い印象を受けている。なお、島地黙雷らによる市会議事堂での仏教講演会に対しては、理解し難かったとの率直な感想が述べられるとともに（4.12）、女子による讚美や街頭伝道を取り入れる仏教界のありかたに対して「耶蘇教嗅い」との批判が表明されている（4.16）。前回紹介分において、キリスト者宮川経輝の演説に感銘を受けていた柳原であるが、宗教的な基本的足場は仏教に置かれているようだ。

運動競技観戦の記事は増加しており、野球、テニス、剣道、ボートなどの対抗戦に熱中している（12.2、2.11、4.5～11、4.18）。当該期の『嶽水会雑誌』が各運動部の試合結果報告に多くの頁を割きはじめていることから、三高文化全般における運動競技の存在感は高まる傾向にあったといえる。

経済状態は豊かではない。寄宿舎では金品の盗難事件も起こっているが（1.23）、郷里の養父母に宛てた書簡を参照すると、この時に限ったことではなかったようだ。パン食への切り替えは節約のためであり、食事を抜くこともしばしばであった。ただ、困窮する友に西洋料理や京極の「すき焼」「ロース焼」をおごることもあり（3.31）、「ミルクホール」にも時々出入りしている（1.14、4.12）。親には送金を依頼する手紙を書くことが多かった

柳原だが、親しくする親戚の若者（京都法政大学に入学）が進学に対する親の理解を得られず苦悶しているのを見るにつけ、恵まれている自分が怠惰であることを反省し、父母への恩返しや学業成就を誓っている（1.19、1.28、4.13）。なお、親子関係でいえば、広島から来訪した実父の京都や大阪での買い物に付き合うこともあった（3.15～16）。

### むすびにかえて

以上、二回に分けて二十世紀初頭の三高生が残した日記を繙いてきた。今後の課題を掲げる形で、本稿を締めくくりたい。

日露戦後という時期における三高および三高生の生活についてであるが、授業や寄宿舎行事のしほりも少なく、自由な日常との印象をもつ。ただし前回も指摘したように、これをもって三高の校風を「自由」と自己規定する現象はまだみられない。こうした自己規定がいつ、どのような経緯ではじまるのかということは、検討に値するであろう。これは大正デモクラシーという時代状況とも関連付けて考えるべき問題ではないだろうか。ちなみに寄宿舎が「自由寮」と正式に名乗るのは1924（大正13）年のことである（三高記念室編『新編自由寮史』〔2006年12月〕参照）。

次に問題となるのは、三高生、ひいては旧制高校生にとって、日記を付けるという営みがどのような意味をもったのかということであろう。柳原の場合、日記はたいてい翌日に書かれたとみられる。帰省の旅や修学旅行の叙述となると文芸色が強まるが、通常の記述は一日単位であり、起床時間の記載をもって始まり、臥床時間を記して終わる。その日の行動記録を旨とするが、前回言及した二年次の日記冒頭には「記憶練習のしらべ」と書かれ、ドイツ語で記載された時期もあって、彼にとっての日記が自主的な習練の場であったことも示す。

筆者はかつて自治体史に関わるなかで、四世代にわたる家長の日記の特質を考察したことがある（「近代史料としての「日記」—山田家日記の世界—」『亀岡市史編さんだより』第11号〔2003年5月〕）。①1850（嘉永3）年生まれの人物が「拙者」、②1875（明治8）年生まれが「余」、③1905（明治38）年生まれとなると「僕」「俺」へ、という一人称の推移が見られた。②の世代になって候文は影をひそめ、さらに③世代になると、横書きのペン字スタイル、日録のみならず、出来事への感懐や他人への感情・評価なども書き込まれ出すという劇的な変化が生じる。

1887（明治20）年生まれの柳原の一人称は一貫して「余」、候文は用いない②世代である。そして、和綴じ縦書き帳面に毛筆で記すと同時に、ペン字で横書きノートも用い（前年の日記）、過渡期的内容的に言えば、すでに③同様に、日記を内面を吐露する場として使っている。また前年の日記に書き込まれた「本人の許諾ナク披展ヲスベカラズ」との文言から、秘密性もうかがわれる。「学生日記」は、「家長日記」に先んじて当初から私的性格をもち、やがて中等以上の教育を体験した世代による「家長日記」にも影響を与えていく存在だったのであろうか。

そもそも、日記の習慣は旧制高校生に広く一般的であったのか、またそれはいつ頃から始まりいつ頃まで継続した文化なのかということも明らかではない。今後の研究においては、彼らの日記を精力的に発掘し旧制高校における日記文化に関する一定の見解を得るとともに、広く同時代の日記文化と比較検討していくことが不可欠であるといえよう。

## 【史料】 柳原英日記（下）

### 凡例

1. 柳原英の日記の1907（明治40）年12月1日から1908（明治41）年4月19日までを翻

刻した。

2. 姓のみの人名については、「柳原英日記（上）」（『京都大学大学文書館研究紀要』第4号）に登場しなかった人物に関してのみ、判明する限りで下の名前を初出箇所に注記した。
3. その他書式や注記事項の体裁等々に関しては、上記「柳原英日記（上）」の凡例に従った。

## 本文

十二月一日晴天（少々雨アリ）

六時半起床寒気特<sup>〔殊〕</sup>の外甚だしく夜に入りてスチームを通せり夜六時頃余りの寝たさに臥床し直ちに起きんと思ひしに十一時頃初めて醒め驚きて自脩室に至りて臥床準備をなして再び床に入る〔故山に葉書ヲ差出ス<sup>〔王〕</sup>〕

二日 晴天（少々雨あり）

五時半起床、聞けば本日十七日より学期試験開始の由而体操も他の級の試験の為め休みとなりしかば庭球にて時を移せり書おとし昨日神戸高等商業学校野球部本校選手と雌雄を決せしも脆くも十九対零にて本校の勝となれり而して庭球は本校より神戸に至りて挑戦せんしも日西山に<sup>〔ママ〕</sup>白き本日に延期せしが本日引続き勝負をなし終に本校の勝利となり実に関西の覇を称ふるに至りぬ万歳を三唱すべきことにあらずや本日は昨日に比し少し暑きと見えスチーム通らず十時臥床<sup>〔王二〕</sup>

三日 晴天

六時起床本日実験にて四時四十分頃迄実験せり寄宿後直ちに沐浴し環兄上様及正風に葉書を出して勉強せしもスチーム破損の為め通らず実に悲感せり十時臥床<sup>〔王四〕</sup>

四日 晴天

六時過起床、本日より体操試験開始す而し兄上より無事入営の報に接す

其隊名等次の如し但本月一日入營の由

歩兵第十一連隊第一大隊

第二中隊一年志願兵

柳原 珪

十一時臥床 本日も鉄管不通〔玉三〕

五日晴天

六時過起床、昨日と等しく正午吉田山に散歩す帰宿後（放課後）沐浴せり他に記すべきことなし十一時半臥床〔玉二、〕

六日 晴天（五時頃少雨）

六時過起床、体操試験、実験は二時頃に帰る聞説本年最後の実験日なりと夕食後散歩傍本屋の借金を払へり本日漸くスチーム通過す十一時臥床〔玉三、肉〕

七日晴天

六時半起床、午後三時迄仏語之れも本年の最終日なりとは嗚呼なつかしや本日正午兄上（環）様及故山母上様より葉書を受取り夕食後寺町を散歩して帰りしは六時半なりき〔玉三、〕

八日晴天

五時半起床、午後理髪して沐浴し八時半臥床〔玉三、菜、〕

九日晴天

五時起床体操試験、放課後市毛保君退学の為め送別会を階樂亭にて催せり而して散会せしは五時なりき十一時半臥床〔玉一肉〕

十日雨天

六時半起床昨夜より暖かなりし勢か目を開けば雨降りつゝあり然れども漸くにて晴れ夜に入りては満天皆星の有様なりき而て化学実験は正午迄にて休みなりしかは夜は十一時過迄勉強せり〔玉三〕

十一日晴天

六時起床、本日韓皇儲入洛ありしを以て參觀せるもの甚た多かりき本第一学期試験時間表発表せらる次の如し

十七日化、十八日賀来、

十九日武羅<sup>〔ワッソ〕</sup>、野々村 廿日大井

廿一日伊藤、英、 廿二日日曜日

廿三日物理、

本日は何も思ふ如く勉強出来ず依て九時半起床す〔玉、菜、豆〕

十二日、晴天

五時起床、羅典は休講、本日正午の食事後卅分を利し友人三四名と共に歩を平安神宮に運びて韓皇儲歓迎の式に至りぬ然れとも猶少し早しと見え小学校生徒の集合中なりき本日にて賀来及大井両先生の講義は最終にて後日の時間は不審時間となれり、十一時臥床

十三日晴天

晴天、六時起床、午前体操休みの為め物理実験を繰上げして十一時にていよ〱本年の授業を終れり而して本夜八時頃より我室友相謀りて会合（茶菓あり）して雑談三時間の後閉会したり而し余は十二時臥床す〔玉三〕

十四日 晴天

七時起床、本日は全く休課なりしかは余は教室に至りて勉強せり十時臥床、〔玉二、菜〕

十五日 晴天

六時起床、化学を暗記に殆んど日時を費せり本日は夕方より電燈点火せさりしかは全室一同寺町地方に散歩せり而して九時迄点火せず其後九時半頃に点火せり十一時臥床〔玉二、〕

十六日 晴天

六時起床、いよ〱明日化学なりしかば相変らず化学暗記実に徹頭徹尾の暗記と云ふの外なし十一時臥床、〔玉二、〕

十七日 晴天（雪雲）

五時四十分起床本日は試験開始の当日なるのみならず早朝より雪降り始めたり嗚呼之れ何の前兆ぞや最本日の化学は不幸と云ふの外なし十一時臥床、〔玉三、故山に葉書を出す〕

十八日 晴天（雪雲）

六時半起床、両三日前より寒きこと限りなし

本日は賀来先生の独逸試験なりしも化学の程の不幸にはあらざりき十一時臥床〔玉三〕

十九日 晴天

六時起床、武羅氏は稍可なり  
野々村先生のは云ふに及ばず  
十時半臥床、〔玉二〕

廿日晴天

六時起床、大井先生は大失敗、十一時臥床、〔玉二、〕

廿一日晴天

六時起床、英語は大失敗なりしも羅典は稍可なり十一時臥床〔玉一、豆〕

廿二日晴天

六時起床本日は日曜日のこととて稍気を軽く持ち只に時々物理の準備をなせり而して九時半臥床ス〔玉一、〕

廿三日 晴天なるも雪降る

五時半過ぎ起床、昨日はあまり冷氣催したりければ明日は如何と思ひしかそもその誤なりしならん本日起床のときより何んとなく気分悪しく物理試験も中途より熱心に受験するの元氣なく只に時間の来るを待ちし有様なり然と雖早く退室するの元氣もなく二時半の長時間を教室にてすまし帰宿せり抑も本日は起床のときより降雨少しありて受験中は特に甚だしく殆んども遠くを眺むる能はさる有様なりき然れとも午後は幸にして好天気となりしかは歩を寺町に運ひ帰村の準備をなせしかども不幸にして風邪は増々余を襲ひ止むなく帰村を一日延期せり当夜は新聞紙を売却して茶話会を催せり九時半臥床、

廿四日 晴天

七時半起床午前中寺町地方を散歩して午後は空しく時を浪費し六時半いよ寄宿舍出発し停車場着は七時十分頃なりき時に驚いたるは京都より尾道迄の汽車賃二割引にて僅かに  
壹円九十銭

なりき京都発はたしか八時廿分頃なりしならん  
あゝ京都の地よさらは——いざさらば!!!

廿五日晴天

尾道着午前四時五十分、直ちに腕車を馳せて内海丸問屋に至り今まきに出港せんとする第二内海丸に渡船をやとひて乗船し仁方港に入港せしは十時半頃なりき風邪の気味ありしかば床を敷きて服薬するに到りぬ九時臥床

廿六日晴天、

七時半起床本日も相変わらず臥床して時には起き時には臥して日を消費せり

廿七日晴天

本日は少し全快せりと思ひ起床せしは七時頃なりしが猶ほ全快に至らずと見え気分悪しく実に閉口仕れり

廿八日晴天

起床せずして起きたり臥したり

廿九日晴天

起床七時、本日は帰省せんとと思ひ立ち八時半出発して灘に向ひしに不幸にも番船最早居らず止むなく徒歩にて阿賀に向ひしも数日間の病氣の爲めに大に疲労せしと見え実に五歩に小憩十歩に大憩しつつ帰省せしは十二時過なりき直ちに餅つきをなして其御陰で再発の病を得たり

卅日晴天

本日は朝より夕まで臥床、大に疲労す  
卅一日晴天、

本日は猶気分少し悪しく実に閉口此上なし

明治四十一年一月一日

起床六時半、朝食七時半過

新年状を出せし氏名は左の如し

田中国平君 浅田一君

横井薫君 大原盛三君

広田市五郎君 石田蓮城君

宮田道夫君 頼惟一君

村上純一君 千秋二郎君

（前田前之助 城谷淳君  
前田栄之助君 大久保一雄君  
荒木正憲君 青山莞爾君  
吉田三直君 森沢二郎君  
（上海日信洋行華昇花廠にて森沢二郎）

楠宗道君 山本喜造君  
小酒井光次君 早川与一郎君  
山本満兵衛君 大木文哉君

本日広島へ兄に面会に行くべき筈の処兄上よりの書状により明日となせり

一月二日晴天

七時起床、雑煮に腹を肥やして呉に向ひしは八時なりき而して山本着は十時頃なりき然るに何時待つとも甲斐なしと不平をこぼしつつ居る内に電報あり其意に本日行かれず故に広島に来れと依て山本にて昼食を済まし午後一時半の列車にて広島に向ひ広島駅着は二時半なりき直ちに車を馳せて立石旅館に至りしに不幸にも兄上様は不在中なりき半時間計待つ内に兄上様は兵士服に面は日に焦げて何にも日本兵士の面目をして表はれたり一寸挨拶をなして色々と持ち来りしものを食する内に早や五時となりしかば夕食をすまして後明日兄上様は仁方に来らるゝ由なりければ余は直ちに呉市山本方に来りて雑談に耽りしは午後九時頃なりき而して臥床は十一時、

一月三日晴天

七時起床、約束通り八時山本の敏之と共に仁方に向け出発せしに呉の峠も過ぎたるとき正風と母上様と来らるゝに遇合せり依て共に偕に引返し呉に向ひしに中途兄上様に合ひ一寸一語を交へ兄上様は仁方に自転車を馳せらる余等四人は宮原真槌様方に行き午後四時頃迄兄上様の帰らるゝを待つこと実に屢ばあくびを出せり然る内に母上様は山本に出られしに兄上様は自転車破損の爲め予定の時間をくるひ出せし為め汽車時間の都合上直ちに停車場に向はれし由当日は

午後五時出発して仁方に行かんと思ひしに元屋にて止められしかば仕方なく当夜は元屋に宿り夜中二時頃迄百人一首にて騒動せり

一月四日晴天、

八時起床、午前中は市中を散歩し午後五時夕食を終り母上様と共に□人のものの行燈を片手に用意して仁方に向ひ帰りしは午後八時頃なりき直ちに湯に入りて更らに腹を肥やし床につきしは十時頃なりき

一月五日晴天

七時半起床、午後三時過ぎ仁方出発して阿賀に向ふ大に急ぎしも到着は日は田山に<sup>(マ)</sup>白きたるのみか人の面も分明ならさる頃なりき聞けば下柳原の伯母様は本朝死亡せられたりとて葬式の時に遇合せしなり

一月六日晴天

六時起床本日は午後仁方に向ひ出発せんと思ひし午後細川先生の弟来りて晨人君との面会を勤<sup>(勤)</sup>むるや切なり依て本晩夕食後を期して学校に会合せんことを約して細川君に其交商<sup>(交商)</sup>を依頼し余は夕食を済まして直ちに学校に至る

時に六時過なりき待つこと三時余にして待つ君は来れり話は数派に分れ其源も断ゆとも見えねば十時半思を決して帰路に付く中途君は其真底<sup>(底)</sup>を余に<sup>(話)</sup>語り余に告ぐるに勉強し以て大に成效<sup>(成)</sup>せんことを以てす余は君の不遇には実に憐然として将に涙も雨など斗降らんとせり然れども余は之れを忍ひでは出来る限り彼れを慰めいよいよ決別を断行せりそれより余は帰つて臥床せしも容易に目も閉ぢず寝れりと思へは晨人の君の不遇を夢みつゝありしなりき

七日 少し雨天、曇天

六時起床、七時いよ／＼なつかしき故山を去りて仁方に向ふ中途広村にて少雨<sup>(カ)</sup>に遇ひても幸にして湿鼠とはならざりき仁方着は九時なりき午後は少し風起りたるを口実に上京は明日となして床に入りしは十時頃なりき

八日 晴天

六時半起床、直ちに回漕店に行きて入船時間は九時なるを知りて帰つて朝餐を終へ（九時少し前二出発し海岸に至り耳を欬つれば汽笛聞ゆあれは如何と思ふ内に店の小僧の叫ぶあり依て其危機一髪の幸を悦びつゝ船に乗り尾道着は午後壱時半なりき直ちに停車場に至りしに時悪しくも好都合の列車なしとやかくする内に赤松良太郎君来りて余に告くるに入浴を以てす即ち相談の上三時五十余分の列車にて岡山迄来りそれより急行券を買ひて京都着は將に一時なりき時は夜中のことなれば人力車も吉田町に来らず之れも幸と徒歩にて寄宿舎に帰り床に入りしは午前三時なりき

九日晴天

七時起床、明治四十一年の京都の朝の光景は本日<sup>〔マ〕</sup>を以て最始とすれども之れを眺めんともせず洗面後直ちに朝食をなして登校せしも本日は全課休みなりき聞く処によれば昨日も出席簿を繕しと依て寄宿舎の欠席簿に其由を記せり我室にては小酒井荒木をのぞくの外は全て帰舎せり本日午前十時頃広田君と共に五条の色紙短丹商水谷京三郎方に至りて父上よりの依頼物を尋合して帰る時に一時半なりき臥床十時半、

封書 相原巖様

葉書 故山、広島の上上、宮原隆道君〔代菜肉〕

十日 晴天

六時過起床 本日岸教授休講の爲め体操は出欠席を取りて只に物理実験講義ありしも試験の成績比評に大部分を費せり余は其時報告書の乱雑なる一人に数へられ聞く処によれば僅かに五十点の由、只に注意すべきは今後にあり正午浅田君と共に横井君の入舎の爲め手助にと出掛け午後貳時入舎せり、夕食後三人寺町を散歩して帰舎す時に六時半なりき本日小酒井君の新年状を受取る

附記休暇中に来りし新年状は宮田君及

東京市本郷区弥生町三、不破方 前田栄三郎君

の両氏なりき

十一時臥床、

十一日 雨天晴天交来る

六時起床大井教授休講及仏語も休み、夕食後散歩に出掛けしも降雨の爲め中途引返せり而して午後八時頃隣の石田君来りて鞍馬山行を誘ふ其説に曰く本日は其名も高き鞍馬の火祭りなり幸にして今夜は好天気なり行くべし——と余は行かずと思ひしも全室友の元気旺盛なるに眩惑せられ終に同道するを約し隣室友の五名と共に都合十式名下駄に該当の服装にて舎を出立せしは名月寒く冲天に掛かれる午後拾時十分頃なりき道を上賀茂の堤上に取り浅田君のリンコルン氏の言行談を始めとして印度人ハリダス氏の情に入る奇談に耳を傾けて上加茂神社を過ぎし頃は早や鎌切の月は西山に隠れ時々刻々暗より暗に入り剩へ道は益々険悪となりぬ、二軒茶屋に腰を掛け浅田君は下駄を損じて草靴を買ひてある間に余は茶に咽を湿しつつ殆んど十二時頃迄爐否焼大に身体を温めぬ、

十二日 晴天、夕方少時降雨あり

かゝる内に本隊は前面に進み終に一小堂にて少憩しつゝあるに遇合す進む程に道路は雨天の三条通よりも猶更にして灯提はなく只に他の参詣人の燈の助けによりて迅速なる歩調をも忘れて鞍馬寺の麓に到着しそれより少時の休養の後再び他人の三婦人の灯提をたよりに鞍馬寺に参詣せしは二時前なりき然れども中途茶屋にての土民の談話は邪にあらざると見え火祭の影だにもなれば記念スタンプを得て後寺下の大木の火を囲ひて少時漫然たりしか二時半過ぎ再び帰路に付き余は道傍の穴に墜つるの滑稽を演じて横井君の大悲戯を対照しつゝ二軒茶屋に立寄り道を下加茂道路に取りて峠の如き山路か道路かは知

らねども辿りて寄宿舎に帰りしは午前六時頃なりき帰路は暗黒なること特に甚だしく其如何なりしかは次ぎの実例にて知るべし

本隊は知らず知らずの内に一列縦隊となりて前の人の後を辿り行きしも皆黒の外套なるを以て自己の前に居る人をも知る能はずし屢衝突し只に頭に手拭の如き白色のものを纏へるもの存在を仄かに認むるのみ故に平野君の如きは田中に落つるの醜態を演ずるに至りぬ、

先つ朝食を終へて湯に入り床に付き午後二時目を開くれば太陽皎々として余を驚かし一時漠然たりき夕食を四時半に繰上げたり本日午後五時頃小酒井君帰舎せしかは午後六時半頃より会合を(新年会)なして四方八方談話をなして九時半散会せり十一時臥床、〔玉、昼欠、〕

十三日 雨天

六時半起床本日は温きか為めか目も開かざりき体操休み、武氏より新年状の答状を得たり夕食後一寸雨止みしかば散歩に出掛けしも又もや降り始めしかば**ブッター**を横井君と共に講ひ帰舎せり眠の悪魔余を襲ふて勉め得ず止むなく十時臥床す〔本日より昼**パン**となす〕

十四日晴天

午後より化学実験四時帰舎す沐浴後夕食し散歩傍々三名と共に**ミルク**屋に入り帰りしは七時、十一時臥床

十五日 雨天

五時半起床、早朝より少雪ありしも始業後よりは降雪甚しかりしが正午に至りて雨となる午後の体操は休み、本日は夕食欠となして横井浅田の両君と共に偕楽亭にて西洋料理を餐す本日は特に寒かりしは他日に異なりて記すべきことなりき十一時臥床、〔夕食欠〕

十六日晴天

六時起床、正午より稍々烈しき風起りしも夕方に至り風きとなりぬ、寺町地方に散歩して帰舎せしは午後七時なりき、十一時臥床

十七日晴天

六時起床、本日の物理実験は要するに不<sup>(マ)</sup>成効に終れり剩へ帰舎せしは五時半なりしかは夕食散步もなさざりき

十一時臥床、記せよ物理実験報告を〔豆、〕

十八日晴天

六時起床本日より仏語教授を開始す夕食後は散歩せずして一室に蟄居し辻亮吉君に病氣見舞状を差出す十時臥床

十九日晴天

六時起床、嗚呼そも本日曜日を如何にして暮さんか旅行せんか早朝の天気模様理由を付けて之れも中止、否本日は元来正午迄勉強と思ひしものを、されど如何せん雑談に時余を費し、を、午後一時頃横井君と手を携へて道を南禅寺に取り途中の雑談偶ま大学の選定より東京、京都の経済の差異に及び果ては帝国大学迄の学資金合計壹万円以上となるに至りいよいよ父の恩山よりも高く母の恵は海よりも深きこと今更ながら重く感せられ孜々として勉め此鴻恩の萬分の一を報いんと念湧くが如く心の泉より来りぬ南禅寺より岡崎公園に至れば自転車競走の最中なりしかば暫くイみて見物し三時半帰舎して沐浴す夕食後は寺町京極を経て円山公園を散歩して十六夜の月に藤原為家の室、阿仏尼のことを思ひ出して七時半の帰舎も夢路を辿りし心地しぬ、十一時半臥床

廿日雨天

六時起床、第三、四時間目の体操時間雨天の為め休みとやらの揭示はよけれども余の体操時間の如き好天気にて余は化学実験をなせり本日より再び昼食を開始す本日は例外として夕に**パン**を食す食後横井君と共に寺町地方に杖を曳きしに不幸にも中途霖雨か夕立かは知らねども稍烈しく降雨に遇合ひ早々の体にて走り帰れり、本日正午授業科及嶽水会費を支払せり十一時臥床〔乳、パン、中止 夕欠〕



廿一日晴天、

六時起床、化学実験五時半迄、思ひ出せば昨日呉港長の木町宮原隆造君より手紙を受取り夕食後直ちに机に向ひしとは云へども時既に六時過なりき、十一時臥床〔玉一〕

廿二日 雪天

六時半起床、体操立座先生隊長の下に吉田山頂の敵兵に向つて突撃を試みたり然れども中途駆足の命令下るや諸兵卒は此機逸すべからずとの勢にて疾走し其大部分は何所に行きしものやら分明せず依て余等も山頂より直ちに帰路に付けり三時頃より一時間計庭球をなして夕食後散歩せず本日は前日の温暖の反動と見え寒氣特に甚だしく雪時々降り然れども積む迄に至らざりき十一時臥床

廿三日 晴天

六時起床、岸教授少し遅刻せらしを機として全生徒大急ぎにて教室を飛び出で大目玉を得たるはさもあるべき筈なり厨川先生本日休講なりしかは庭球をなせり午後は組長の尽力により休課となる、午後聞説本日中何時とは定まらねども盗賊入りて時計、金銭等を取去れりと特に南舎は余の室を除くの外他三室に入り中舎、共に盗難にかゝりし由氣の毒の至りなり依て浅田君の発起により本日点検後南舎全体して盗難者を慰籍会を催さんとせしも容易に定まらず時に中止し時に一致し再三の変化の後終に一致して我室を会場とす南舎の盗難者は第一室四名、第二室二名、第三室二名 都合八名、

中には僅かに九銭の盗難者さへありき当夜の会は十一時半閉会す而して余の臥床は十二時なりき〔卯〕

廿四日晴天

六時半起床、物理実験は五時迄なせしも得たる所蓋し細少なりき十一時臥床〔卯二、〕

廿五日 晴天

六時起床午後二時迄仏語教授ありたり夕食後

荒木君と共に寺町を散歩して所謂ランギペンを買求めて帰舎せしは八時に垂んとせり十一時臥床

廿六日晴天

六時起床、八時より庭球をなし十時に至る四時沐浴し七時過夕食パンを食す十一時臥床〔牛乳 夕欠 代菜〕

廿七日晴天

六時半起床、森総之助先生休講の爲め体操を第一時間目に爲し真の体操時間は余は化学実験のために費せり而して放課後四時迄約一時間庭球をなして後は勉強、夕食後と雖も本日は散歩もせずして一寸図書館に入りて後帰りて机に向ひぬ、十時臥床、抑も本日より十時臥床を習慣とせんと欲せしかども数次起こさるゝには大に閉口し此企も全く水泡に期せり〔卯〕

廿八日 雪天

六時過起床、近来の寒さは特の外にて本日も実に摂氏0度下と思ひし而して正午迄も時々降雪ありしのみか午後の降雪より夕方降雪は稍々烈しかりき実験（化学）五時にすまし帰りて湯に入りしに浅田君はエーテル蒸気吸収の爲めか頭髓に異状を呈し臥床するの止むなきに至れり注意すべきことなり聞く、エーテルを以て中毒せしとき頭部を冷やすと共に腹部も氷などにて冷却すべきことなりと依て浅田君にも之を施せり

本日正午飛報あり之れ親愛する我友柳原農人君よりなり曰く、

一月十一日午前六時養母病氣の爲め養生相叶はず溘然他界の人となれりと之れが爲めに予定の目的を達するを得ず本日迄に家内の整頓などにて多忙なりきと嗚呼何たる不幸ぞや思ふて此所に至れば我身の幸なる何んぞそれ多きや然るにこれをそれ甘んじて何の勉むる処もなく父母を落胆せしむるは云ふも更なり此農人の君をも悲ましむるは何よりの不孝不忠不義のものなり

勉むべき哉十一時臥床、〔豆、夕欠〕

廿九日晴天

午前六時前起床、午後の体操時間は一部我級生の石山にミーチング開会の故を以て休みとなれり故に余は物理実験をなす三時余、それより図書館にて化学実験に関する参考書を一見し四時帰舎して後六時過迄勉強をなし其れより夕食なるパン<sup>〔マ〕</sup>を書し図書館に入りて九時に至る本日浅田君は御帰省、横井君は石山の集合に行かれ我自脩室は稍々寂寞の感あり十一時臥床〔代菜、夕欠〕

卅日 雨天は夕方より

六時起床、抑も本日は孝明天皇祭にて泉涌寺を指して参詣せしもの甚だ多かりき余も行かんとは思はざりしが、いささか其意志なきにしもあらざりき依て此勃々の気を打消さんが為めに十時なり十一時半頃まで庭球をなして一時半昼食をなして後理髪店に至りて頭髪を刈り再び三時迄庭球をなして後机に向ひ夕食前湯に入れり五時頃より降雨始まり本日大津行の人々の悲感幾何ぞやとの感起れり十一時臥床

卅一日雨天

六時半過起床昨晚よりの降雨の影響と見え暖気加はり計らずも本朝の如き遅起きをなせり八時過浅田君大阪より帰舎す、体操は休みなりしかば直ちに物理実験講義をなして実験に移れり本朝故山よりの書留(三十円)に接つし昼食後吉田郵便局に至りて貯金せり帰舎午後五時半、直ちに夕食なして机に向へり、十一時臥床

二月一日晴天

六時起床、仏語教授午後二時終結す三時頃庭球をなす午後五時半より寄宿舎集会を催せらるる会費は三十六銭五厘他に余興費十銭なりき而して林舎監長の蜜柑寄附ありしか不幸にして琵琶師の不接<sup>〔カ〕</sup>にして却て一年一部の馬場純氏とやらの琵琶は聴者をして恍惚とならしむ終結は午後

十一時以前なりき而して臥床は十一時半なりき

二日晴天

七時半起床、午前九時半頃庭球にて足を泥にてけがし正午中止し食後丸善書店に荒木君と定量化学分析書(四円五十銭)にて買ひ帰舎せしは午後貳時なりき午後四時半沐浴し食事をなしき而して九時より集合をなせり之れ正月一日の祝賀の為めなりしが其食物は

酒のかすと醤油・砂糖とは

実に驚き入りし次第なり之れも浅田君の申出なりき、十一時臥床

三日晴天

六時起床、十一時臥床、

四日晴天

七時起床、英語休講化学実験は午後五時半なりき九時より平野君の廿銭の寄附に加ふるに各五銭を加へて集合をなせり十一時散会と共に登壇す〔代〕

五日 晴雨交々来る

六時半起床、午後は正午より降雨ありし為め休み依て化学実験に従事すること約貳時間にして帰舎し机に向ひしのみ、十一時臥床〔肉〕

六日

六時半起床、本日は特<sup>〔殊〕</sup>の外寒きかは登校の際と雖も猶零下2度を示せり終日連続はせざれども雪紛々して下り実に夕食後図書館に入りしときなどは堪へ兼ねる程なりき夕食後山本君を訪問せしも不幸不在なりしかは直ちに帰舎す、十一時臥床〔本日よりパン中止ス 代〕

七日 雪天

六時起床岸教授本日休講依て体操物理実験講義をそれへ繰上げ三時実験を終る抑も本日は実験に追はれて昼食をなせしは実に午後貳時なりき夕食後再び山本君を訪問せしも折悪又もや不在とはなんたる不幸ぞや帰舎せしは七時前なりき之れも夕食六時なりし為なり十一時臥床

八日 晴天

六時起床、夕食後横井氏の寄贈により南京豆の御馳走に配り満腹せり之れも浅田氏等他三名の不在の故なりき而して本日は夕食後書物の競売をなし殆ん<sup>〔夕〕</sup>十一時迄を空費せりとは悲むべきことならずや、

九日 晴天

六時半起床、十一時舎を出で再々山本君を訪問せしに彼れは昨年末転宿せし由を聞き一驚をきつす、さて余は昨日来風邪の気味ありしが幸にして本日は好状態となりしはさても天福なる哉十一時臥床、〔三卯〕

十日 晴天

六時半起床、大井教授休講次いで伊藤教授も休講となし午後の課業は全く休みとなりしかは計らざりき

午後一時間計庭球をなして後机により夕食後は本昼楠氏来舎せられ予て定めたる中舎九室の会合も本日は中止となりしを報告せんが為め石田君と共に柳原保君を訪問し談ずること数時間にして帰舎せしは将に検鐘の鳴りつつありし時なりき帰り見れば我室も亦会合を開き居たりければ其一員となりて談偶ま大坂北野中学校長金田理学士の神通力に及び色々の附会の説を加へたるの末胆力養成の目的にて吉田山、黒谷の如き鬱々たる場所に毎夜時を定めて独歩往復せんと約なり明日（？）より開始せんとして臥床せしは十一時過なりき〔（？）三卯〕

十一日晴天

七時起床、本日は抑も紀元節にして九時半よりは例により本校講堂に於て式場を挙げたりつらへ回想するに昨年の本日は四方八方所謂銀世界をなし分列式も中止せられしかは各々杖を各各所に曳きしなり本日は早朝及其午後少々の降雨か霰かはありしども一般に好天気にして分列式も事なく終結せられ各体操教員の御満足一方ならぬを見受けたり、式後庭球をなし正午に至りたり午後二時より府下連合軍対本校撰手の

野球仕合ありしも不幸にして余は之れ見るを得ざりき夕食後予定の会合を楠氏下宿にて挙行し開会は七時頃なりき会合者は

伊藤秀雄、柳原保、石田蓮城、浅田一、早川与一郎の五氏なりき

余興とは柳原保君の赤垣源蔵（四十七<sup>〔卯〕</sup>氏の一人）の話家、俳句の綴合などありて時の十時となりしも知らざりき依て驚き帰舎すれば時は將に十時四十五分ならんとは、依て日誌を書すことかくの如くにして臥床す、時に十一時半なりき

漏記：本日式後本校三部全部は本校庭に於て陸上、海上、ならびに済美の三優勝記念の為め写真を取れり、〔二卯〕

十二日晴天

六時起床本日加来教授少し（五分か十分か）遅刻せられし機を見て三々五々教室を逃走せる内に先生来られ余等約十名計のものは級長の指揮により教室に入りしも他の大多数は入り来らず或ものは吉田山に或ものはこゝにと分れたりしかば止むなく余等のみ教授を受けたり大井教授休講なりしかは体操を繰上げ午後は休業なりしかば三時迄庭球をなしたり夕食後横井浅田の両君と共に丸善に向ひしか途中千秋村上国分、田中の四君に遇合し供に偕に目的地に進みぬ、而して注文せし書物は左の如し

Rauber I—VI

Spalteholz

Stöhr

Tigerstedt

帰舎せしは正に七時なりき而して点検後予て約束せし胆力養成を実行せんとして闇<sup>〔カ〕</sup>を引きしも大半は先日の約束を履行せず終に浅田君は率先して吉田山及黒谷の墓所<sup>〔カ〕</sup>を廻行して午後十時過帰舎す最本日は月夜なるを以て其目的を達するを得ずとは浅田君の言なり故に其實行は暗夜迄見合せとなりぬ、臥床は十一時半なりき

〔卯〕

十三日 晴天

六時四十五分起床、野々村教授休講放課後沐浴して机に向ひたり抑も余は本昼よりパン食を開始せしかば五時頃となるに従ひ空腹は余を襲ひたり七時過散歩に出て八時過ぎ帰舎して十一時迄勉強して臥床す〔卯〕

十四日 晴天、夜に入りて少雨あり

六時半起床、本日より第一時間目の空時を利用して森総之助教授より物理学の受くることとなりぬ之れ物理の遅れ居しを以てなりと午後は物理実験にして帰舎と四時半直ちに夕食して六時より勉強し十一時に至る

十五日 晴天

六時半起床、本日都合により午後の仏語教授休み依て二時迄庭球をなし夕食は四時半、後頼君を訪問せしも生憎不在なりしかは歩を丸田町に転じて名刺屋及古本屋に入り帰舎せしは七時半自脩室に至れば堅く鍵かゝり居れり依て直ちに講堂に至れば今將に橋本教授の講話の真中なりしも不幸にして其關係を探知し得ざる内に先生は喝采の裡に降壇せられ次ぎに神戸法学博士は欧米より帰朝当時に似ず極めて質朴なる袴、羽織の出で立にて登せられ欧米に於て感ぜし様々のことを話されたり時には經濟、法律にはたり時には運動に及宗教に學問に人種、言語の差異は申すに及ばず全て目に触れ耳に入りしものをば実に面白く、御可笑しく諄々と解き去り解き来り聴者をしてあかしめざりし所実に感服の外なかりき然れとも少し早口なりしは璧に瑕瑾と云ひつべし其内耳新らしきものを列記すれば次の如し

英語を解すれば世界一周旅行すること得

欧州の北と南は宗教も旧教新教と異なると共に人民勇悍なると柔順の異なるのみならず其富榮の点も之れに酷似するは研究の価値ある問題なり

欧州殊に仏、伊兩國の淫売の如きものゝ盛なる実に驚くに堪へたり例へば仏の某博覧会内に一館を設けありたり入りて見れば裸体の美人ありて吾々男子を瞞着せんとす以て一般を探知するを得べしかくして米国人の仏國に金銭を輸入する夥きものなりきと、

此演説の終結せしは午後九時なりき直ちに帰舎せしか本演説の終りは十時四十分頃なりとは実に未曾有に遅かりきと云ひべし

十一時臥床

十六日 晴天

六時半起床、正午迄勉強中途吉田郵便局に預金を受取らん為め外出せしのみ午後は浅田、横井両君と共に北野の梅見にと出掛けたるも案に違はず未だ早かりしも其蕾の堅く閉じたる様も亦一種云ふべからざる風致ありとは自れの負惜か!!!其れより平野神社の冬梅を一見して帰舎せしは午後四時なりき直ちに沐浴して食事をなし六時頃本夕の会合の菓子を買はんと寺町に向ひ七時帰舎せし予定は九時後の筈の会合も菓子の佳香に恍惚となり直ちに会合にと着手しぬ、観極まりて九時の点検の来りても夢と云はんか幻と云はんか何時の間にやらチリンチリンの鐘の音に驚かされぬ、九時後直ちに会合を中止して机に向ひしも睡氣全身を襲ひて実に閉口せり然れとも臥床は十一時なりき

十七日 晴天

六時半起床、本日武羅氏休講依て此時間に体操を繰上げ剩へ午後は種痘の為め二時間とも休講とは実に……?!!

昼食後庭球して一時半種痘をなして帰舎す夕食円山公園を散歩し寺町にて村上後藤国分の三氏に遇合せしも国分君は分れ余の友横井氏と都合三名は後藤氏の下宿を襲へり而して帰舎せしは八時なりき之れより十一時迄は一身不乱とは喜とすべきか

十八日晴天

六時起床、昨日種痘をしたる御陰で昨夜は痒くて思はず痒きたること限なし

正午は面会人なりとの報に接し門に出すれば青山君来りて余に手紙を示して曰く此れ配達夫の誤にて大学に来れりと取りて見れはなつかしき農人の君よりなり如何はあらんと開けて驚きたりと愚の極ならずや実に別紙の如き書簡なりき依て実験を四時半にすまして夕食を喫して法政大学に到りて其由を確知し帰舎せり時に六時なりき嗚呼我亦久しく書く能はず云ふ能はず只兄の上京の期を待つのみ十一時半臥床

十九日 晴天

六時半起床、午後の体操は先日の種痘の為め烈動を排除する目的にて単に吉田山地方に歩行否野外体操講演に行き天智天皇山陵の前にて散会して帰舎せり四時頃再び浅田君と共に吉田山頂に散歩を試み夕食後は更らに京極を<sup>(経)</sup>徑て円山公園に散歩を取りて帰舎せしは午後七時過ぎなりき十一時臥床、

本日柳原農人君を<sup>(ママ)</sup>回答の封書を差出せり

廿日晴天

六時半起床、本日昼食は都合により中止し賄の食物を取れり夕食後浅田氏と共に岡崎公園に向ひ帰路池尻君に邂逅し共に相談して帰路に付けり六時寄宿舎に入れり十一時臥床、〔昼食〕

廿一日晴天

六時半起床、段々暖かくなつたのか若しくは一時的の天候かは知らねども両三日の暖気は実に春の気持せん計なり依て本日本年最始のフトンぼしをなしたり物理実験は午後四時半に終結し夕食後円山公園に散歩を試み帰舎せしは午後六時なりき十一時臥床〔玉〕

廿二日 雨天

六時半起床、本日も仏語教授休講

先日来の暖気も本日早朝よりの雨の予報にや然れとも午後三時頃よりにはかに晴れ夕食後も急なく円山、京極を散歩し得たりと雖も寺町地

方の道路の悪しきことさながら田の中を行くか如く靴を穿てる余は大に悲感<sup>(ママ)</sup>せざるを得ざりき  
帰舎せしは八時なりき十一時半臥床

寺町散歩の途中山本君に合ひ其下宿の福田なるを聞いて分れたりそれよりは二三度<sup>(カ)</sup>古本屋をあさるとは吾々書生の免れがたく習慣なり十一時臥床〔卯〕

廿三日 晴天

七時起床、午前中は机に凭り午後は寢室の蒲団の上で新聞などを讀みて後物理を研究して夕食後は円山、京極地方を散歩して帰舎す、時に七時十五分それより十一時迄机に向ひ床に入りしは將に十一時半に垂んとす

廿四日 晴天

六時半起床、本日体操は生憎か何かしらん丁度四時間目の始め雨降り始め終に休みとなりしものゝ午後<sup>(ママ)</sup>否氏時間の半も経ぎ去らざる内に晴天となりぬ、夕食後は散歩に出掛けしも雪降りしきりて止むなく帰れり十一時臥床、

廿五日 晴天

六時半起床、化学実験は四時半に済まし夕食後山本君を訪問し茶菓の饗応を受け帰舎せしは午後八時過ぎなりき帰り来れば我室にも規約より得たる罰金に会費を少し加へて茶菓会を催せり直ちに之れに加はりて散会せしは十時なりき十一時臥床、

廿六日 晴天

六時半起床、本日物理時間多忙の為め武羅氏の時間を遅刻せしかは氏は大に怒りて余等の多分を欠席となせり

昨日以来寒さ甚だしく本日午後の体操時間の如き実に愛宕嵐の為め吾等連兵大に困却せり夕食後横井氏と共に円山京極地方を散歩し途中池尻、村上の両君と遇合し共に吉田町に向て帰りぬ時に七時十分、十一時半臥床、

廿七日 晴天

六時起床、岸教授本日休講、此時間は庭球に

て消費したり本日は昨週月曜以来入浴せざりし吾身を始めて浴せしめぬ垢の積れること夥だしく入浴せること殆んは一時間<sup>〔ママ〕</sup>に及びぬ夕食後横井氏と共に円山、京極地方散歩し七時半帰舎して床に付きしは十一時十分なりき〔昼食（2卵）夕代肉〕

廿八日 晴天

六時半起床、物理実験は四時半にすまして後夕食し二条地方を散歩して帰舎せしは六時半なりきそれより物理実験の報告を書く為め十一時十分に至りて臥床す、本日散歩の途中小雨に降る

廿九日 雨天

六時半起床、大井教授は教科書不揃の為め本日は休講多分来週中も休みならん仏語は0時半より二時に至りて教授を中止す抑も本日は床を蹴つてより以来殆んど雨の止むことなく日没に至り少しの間中止せしも夕食後は又もや沛然として来る余は横井氏と共に散歩傍々池尻生を訪問雑談七時十分に至りて辞して帰舎し更に昨夜に引続き物理実験の報告書に従事して十一時に至りぬ

本朝昨夜の飯の不正ありし為め所謂罰卵一個つゝを分配せり実<sup>〔ママ〕</sup>に余当寄宿舎に入りて以来否生れてより此の方第弐回の罰卵なり即ち余の一年のとき蝦夷の敗腐とやらにてなり〔代菜〕

三月一日曇天

七時起床早朝より暖かゝりしも曇天にて今にも襲はんとする雨模様ありしも只の威嚇にとゞまり何の音づれもなかりしは本日の遠足者の幸いなりし処なり余は午前十時より速水<sup>〔謙三※〕</sup>、松室<sup>〔重南※〕</sup>の諸君と庭球を弄し午後も之れに田村<sup>〔利雄〕</sup>、辻君を加へて余は少し風邪の気味ありしに係らず五時に至るまで引続けしとは実に盛なりと云ふべし直ちに湯に入りて夕食す十一時臥床、〔昼食を開始〕

二日 晴天、風あり

六時半、本日は武羅氏を始めとして加来大井<sup>〔賀〕</sup>両教授休講引続き伊藤教授も休みとなしゝかは午前十時には最早学校より帰舎して自脩室にて書を繙きぬ本日は昨日以来風邪の気味ありしかば終日自脩室に蟄居せり〔肉〕

三日 晴天

六時四十分起床、昨日来風邪の気味ありしかば化実験も午後弐時半に繰上げたり十時半臥床

四日 雨天

七時起床、加来、大井、武羅<sup>〔賀〕</sup>の三先生及雨天の為め体操も休みなりしかは物理のみにて本日は休みなりしも風邪に襲はれしかば寢室の床に入りて華胥国に遊べり再び夕方自脩室に降りて更らに臥床せしは十時半なりき

五日雨天、晴天交来

六時半起床、本日大井先生のみ休みにて午後二時半帰舎せり本日相原正風殿に手紙を差出せり而して故山・仁方より封書を得たり其内容は鈴川貫一君に付いてのことなり本日も十時頃臥床す如何となれば猶未だ風邪の気味あれはなり

六日晴天

六時半起床、岸先<sup>〔ママ〕</sup>は休講剩へ三部二年と野球仕合の為めこの理由の下に物理実験も任意となりしかば余は直ちに帰りて野球仕合を見たりしも我軍大敗を蒙れり帰舎風邪を防ぐが為め床に入りしも終に一か八かと庭球を演習して湯に入り直ちに床に入りしか御陰にて風邪も何処へやら逃走せりと見えたり嗚呼少々の病気には少しも逡巡すべきにあらざるや八時頃よりは同室茶話会を開けり十時臥床

七日曇天時々細雨

五時半起床本日は近来稀なる早起なりき大井休講、昨日野球仕合に敗を取りしを本日は庭球にて倒さんと欲せし庭球も午後0時半開始せしも不幸にも余と広田の組はあまり好成绩ならざりきと欲も要するに我軍は優退一組不戦者一組

及大将（敵）を倒せし横井田中の組を余すに至りぬ本日は五回勝負にして五組つつなりき夕食後国分君を雨ををかして訪問せり氏は本日長距離競争に出でたりしも不幸にして十等後の着にして浅田、千秋、広田、野中の諸子は十等以内にて大楽感を得たりとか、帰舎せしは将に九時に垂んとす臥床は十一時半、

#### 八日 曇天否雨天

七時起床、八時過ぎ横井君と共に疏水に短艇を浮べんと欲せしも中途池尻氏を訪問せしも氏は用事あるとのことなりければ途を更へて清水寺に参詣して帰舎せしは十時半なりき本日の天候は実に一種特殊のものにして降りては止み、止みては降り、太陽光々と輝くよと見れば一天掻き曇り午前の散歩の帰途の如きは一時大雨に遇合し大急ぎにて雨宿りをなせし程なりき昼食後は理髪店に至りて湯に入りて床に入り再び自脩室に來りて勉強し實際床に入りしは十一時半なりき本日午後は降雪ありて夜に及ぶ

#### 九日 雪降る

六時半起床、本日実弾射撃ありと楽しんで床を出ずれば戸外は皚々たる銀世界にて猶其上に積□□かしは降り積る雪は何時止むとも計りがたく為めに学課あることゝなりしも之れも組長のあつ旋により全学課となりしかは午前中に勉強せしも午後は四時迄庭球に時を費やし夕食後は横井氏と共に湯屋に至りて帰りて八時迄寢室の床の中に入り八時よりは荒木君退舎の為め送別会とやの名義の下に茶話会を開き十一時に及べり

#### 八日の増補

夕食後浅田、横井の両君と共に舎を出で立ちし野中君を訪問せしも不幸にして不在なりき依て歩を転して船石君の下宿を襲ひ茶菓の饗応を受けて帰舎せしは九時なり此時降雪甚だしく外套やら傘上の雪は積りて五分計ありき之は支那の墨人か

#### 九日増補

本日柳原農人君より十日阿賀町出発十一日大阪に着し直ちに汽車にて入洛との報に接す嗚呼待遠しき哉

#### 十日晴天、夜に入り大雪あり

六時起床八時横井君と共に途を円山公園に取りていよ—日吉山の射撃場にも進みぬ中途村山氏等と遇合し未だ早からんと語りて笑ひつ目的地に至れば殆んど百人計の同輩は來りて停立せしには一驚を喫食せり、やがて先着順にと演習を開始せしは九時過なりき而して六十点満点として余は僅かに九点なりき本日の最高点は横井君にして三十点なりき帰舎せしは十一時なりしかば一時間机に倚りて後昼食す午後は一時間庭球をなして後湯に入りて書を繙きしが夕方より雨と思ひし雪積りて十時半過頃には一寸以上となりしには案奴<sup>(ママ)</sup>せり十一時臥床

#### 十一日時々雪降る

六時起床、大井<sup>(生)</sup>先日は例により休み且体操も昨夜來の大雪?の為め休みとなりしかは柳原農人君を歓迎せんと武条<sup>(ステーションか)</sup>すより電車を馳せて七条に至りぬ時に〇時半なりき元來着時間不明なりければ此次きの一時着の列車を待たんと場内を闊歩したるも列車は着せり待人來らず一人しほ—と歸路に付きぬ、夕食後荒木君の退舎の為め氏と共に氏の下宿佐竹方に至り七時帰舎す此途中山本君の下宿なる<sup>(カ)</sup>律田を訪問せしも人ありし様子なりしかば入らずして立歸れり思ふに本日即ち本朝の雪は本年の大雪なりき

#### 十二日 雪降る

六時起床、本日大阪より飛報あり即ち我父大阪に來りしにて先日の返書の催促なりき

大阪西区横堀新一橋北詰

篠原旅館にて 相原 巖

之れと同時に正午面会人ありて応接室に至れば柳原農人君あり正月以來待ちに待ちたる人のこととて其悦ばしき実に言はん方なし放課後共

に俱に吉田町に至りて下宿屋を氏の為に探し終に〔欠〕

依て五条の宿屋に至りて宿の湯に入り夕食して人力車を雇ひて下宿屋に來りしは將に拾時に垂んとす霎時の後歸舎しぬ、十一時臥床

十三日晴天

六時半起床、本日は物理実験の日なれども実験は勝手となりしかば直足余等は中止して勉強せり夕食後柳原氏を訪問し次ぎに山本氏を訪して鈴川君のことを尋ね歸舎せしは八時過ぎなりき歸舎直ちに故山に以上の報告をなしたり臥床十一時半〔本日故山より書留來る〕

十四日晴天

六時半起床大井先生休講、仏語は都合により休む夕食後は柳原氏と共に柳の馬場に散歩して歸路に付けり本日昨日の封書及大阪に向け返書を出す、十一時臥床

十五日晴天

六時半起床、午前中は一時半計庭球をなして他は勉強す十二時半頃昼食中の処に面会人ありとの報に接し直ちに応接室に至れば昨日の葉書により父上大阪より入浴せるなり霎時談話の後共に俱に八ッ橋を求め更らに寺町通に出で、古物屋をあさり十日余のものを買求め小僧をして停車場に運ばしむそれより表具屋否短冊・色紙屋なる水谷及熊谷商店に至りて用事を済まし停車場に至れば全て荷物は來れり（之れ場前衣笠亭に置きあるなり）時に六時なりき荷物の沢山ある為め余も共に大坂に行かざるの止むなきに至り六時卅五分の列車にて大阪着八時過ぎ直ちに腕車を馳せて篠原旅館に至りしは八時半なりき父上様の予て約束せられし年宗亮三様は只今歸られ<sup>〔し欠〕</sup>ところとき、腕車を

南区高津七番町

西川本店内 年宗亮三様

を訪づれ共に篠原指して帰りぬ

それより牛肉の酒宴を開き終に夜も式時過と

なりて始めて床に付きぬ

十六日晴天

七時半起床、八時朝食をなし父上様と共に市中を彷徨して露店に入りて昼食をすまし歸宿（篠原旅館）せしは一時過ぎなりき三時よりは父上様は宴会ありと聞き三時半頃いよゝ分れりて余は徒歩停車場に至り四時三十二分の列車にて七条に着、終に歸舎せしは午後七時頃なりき時に広島<sup>〔の〕</sup>兄上より葉書來れり本日は昨日の疲労出でしと見え寢魔余を襲ふて勉強を妨ぐる事一方ならず依て十時頃臥床す

十七日雨天（但午後より）

六時半過起床午後は化学実験にて午後三時半に至る夕食後、船石晋一君を訪問して物理実験の報告の訂正を試む時に前田朝二君及野中良民君來り合せて種々快談を試みたる末は余のみ九時歸舎す十時半臥床、

十八日 晴天

六分廿分起床、大井先生の時間は休みなるを以て体操を繰上げて体操試験をなして分れ午後七時迄庭球をなす夕食は柳原農人君を訪問して午後七時歸舎し故山への葉書を投書すかくして寝むたきをも耐へて十二時に至る、〔代、卯2〕

今日第貳学期試験時間表發表さる

廿四日 野々村

廿五日 賀來

廿六日 化学、武羅

廿七日 物理

廿八日 大井

廿九日 休日

三十日 厨川、伊藤

十九日 晴天

六時半起床、大井先生休み厨川先生は寸時登壇せられしのみ賀來先生は一節授業せしのみ倫理、羅典は休み依て午後は勉強し夕食後山本君を訪問して六時半歸舎し九時よりは同室会合を催し十一時半に到りぬ、



床に入りしは十二時半に垂んとす〔三卯〕

廿日雨天

六時五十分起床、本日物理実験休み、午後は勉強に耽り夕食後は円山公園に散歩を試む拾貳時臥床、

廿一日晴天

六時半起床本日は春季皇霊祭とて各学校は日章旗を翻へし田舎の参詣人は赤毛布を肩に各地を遊覧せりと雖も比叡風か愛宕風かは知らねども北風颯々として膚を刺し刺へ降雪さへありて寒き例へ方なく久しく中止せしスチームを又もや開始せしを以てし其如何に寒かりしかを推察するに余あり十時臥床〔夕欠〕

廿二日 晴天

六時廿分起床、昼食後横井氏と共に南禅寺内の一庵に催されし黙語会即チ浅井（故）忠（黙語、と号す）先生の遺物展覧会に至りて帰舎せしは午後貳時なりき之れより三時迄は庭球を之れこととし五時迄机により夕食後柳原君を訪問せしも甲斐なく直ちに帰舎して再び庭球をなして日没に至る臥床十時十分、

廿三日晴天

六時起床、午後柳原君を訪問し共に動物園ニ入りて新着のカンガルー及象など色々物新らしきものを見て帰舎せしは二時半なりき十時十分臥床、

廿四日 晴天

六時起床、倫理試験ありたり

良心の作用を詳解せよ

ホッブスの学説とは如何

の二問題にて兎に角に本日の試験を終る昼食後柳原君を訪問し夕食後は円山地方を散歩す十時臥床

廿五日 晴天

六時起床、賀来先生の試験ありしのみ午後は一時計庭球、午前も然り、然れども其の御蔭にや十二時迄勉強せざるを得ざりき

廿六日 雨天

六時起床、化学試験は要するに不成績に終る猶本日は武羅氏の試験もありたり帰舎後昼食をなし十二時より雨天の為め散歩も出来ざれば直ちに勉強に取掛かり十時に至りて臥床す、

廿七日 晴天

六時起床物理試験は稍好成绩なりき午前中は庭球をこれこととし午後は勉強に耽り夕食後は浅田君と共に吉田山に散歩し帰路余一人山本君を訪問し七時帰舎し更らに勉強を続けたり十時半臥床〔肉、〕

廿八日 晴天

六時起床、大井先生の試験不成績とは云はずもがな、試験後浅田君と共に京都市立美術工芸学校の展覧会を一見し帰舎せしは十一時半なりき午後三時頃柳原君を訪問しに驚いたり氏は一書を遣して帰宅せりと依て其手紙を翻きて下宿に來りし氏の書簡を受取りて帰舎す夕食後は円山公園、四条京極を散歩して帰舎は七時臥床十時半

本日仁方港相原巖様（父上）に封書を出す〔卯〕

廿九日 晴天

六時起床一日中蟄居して勉強し午後沐浴して更らに勉強を連続し午後十二時に至る

卅日 雨天

五時起床、ラテンも英語も不成績と云はざるを得ず午後は図書館に入りて午後三時に帰りかくする内に四時半となりしとき楠宗道君來り浅田君と共に更に氏を訪問して午後八時帰舎す本日仁方なる正風より無事及第との報に接す十時臥床〔代〕

卅一日 晴天

六時起床、午前七時廿分草靴、脚絆の輕装にて浅田君と共に途を一条寺村に取りて比叡山に向ひぬ此日や天気晴朗にして殆んど一点の雲もなければ悲い哉春霧とやらにて遠く四国の連

山などの遠景を見る能はず其れより頂上を（三高記念碑塔のある所にして四明ヶ嶽にあらず）  
 経て根本中堂に出で更に緩坂を直下して日吉神社に詣で再び大王神社に登りて琵琶湖の景色を  
 両眸に集めて昼食をなく時<sup>(す)</sup>に十一時半なりき午後0時半前茲を出発して唐崎の松を見んとて至りし本年よりは経費の都合により厳めしく柵を  
 結び入場券貳銭を徴集す依て柵外より見て直ちに大津に向ひぬ其れより逢坂山を越へて京都の寄宿舍に着せしは午後四時四十分頃なりき直ちに沐浴して夕食を終へ柳原君を訪問せしに氏は  
 先日帰りてより以来金銭欠乏の爲め正しき食事をせずしてパンを食し大に困却せりと余之れを聞き同情に堪へず直ちに共に西洋料理店に入り更らに京極に至りて再びすき焼、ロース焼を食して帰舎せしは將に九時半にならんとす臥床十時半

四月一日 雨天

六時起床柳原晨人君来りて三食す床を蹴りしときは未だ降雨なかりしも朝食を終へしときは早や天の涙は点々と落花す、余は浅田君と共に大学の記念講演会を拜聴せんとて傘をもちて九時大学図書館に入りぬまづ栄吉君、横川君などに遇合せり母音の理てふ題目の下に村岡範為聴理学博士の講演ありたり（こは別紙に記す）拾時半終結せり次ぎは末広重雄法学博士の民族間の生存競争なる演説ありしも余は大学内を見物せんと志ありし爲め悲むべきも之れを聞かずして午前中に医科大学を一見せり午後は理工科大学に入りしもありとあら<sup>(マア)</sup>る陳列品は全て吾人の耳目に珍らしく一として知れるものなし依てあれやこれやと居合せる大学生に尋問したりしも只に其二三に止まり大部分は之れを等閑に附せしは千載の遺憾と云ふべし帰舎せしは午後四時半なりき聞けば文科大学内にて心理の試験ありし由嗚呼遺憾と重ねば重なるものかなと思ひ

き帰舎後直ちに柳原晨人君を訪問せしに氏の床に付け振り出して尋ぬるに一つの葉書を見せたり之れ故山なる柳原元教氏よりの手紙にして親としてあるまじきことを事に葉書にて通じするとは一時呆然たりき例へば宿料は決して送らず貴様の如き乱心者はとても成効<sup>(マア)</sup>は六つケ敷からんの如し色々談話の末共に寄宿舍に帰りて食事し氏は直ちに帰宿せり此とき明日帰広して談<sup>(マア)</sup>しをまとむるを利策なりと定めたり抑も余か氏も訪問せしときの落胆は言語に絶せる有様にて余に同情の涙ばら／＼と降りぬ嗚呼何たる父しや氏か去日帰りしときは夜の内に具に行き止むなく□□氏と相談の末（中田は勿論のこと）父に面会せずして帰京せしに本日の手紙にすれば之れを大に責むるに似たり余多く言はんと欲すれども言ふ能はず只涙降りて帖を沾すのみ、夕食後は書を翻き十時半に至りて臥床す、時に睡氣来りて余を妨害する限りなかりき

二日晴天

六時起床、九時浅田及横井の両君と共に大学図書館に入りて呼吸の生理てふ題目の上に和辻博士は滑稽の字語を交へ壹時間半の長時間を試みられ次ぎに狩野直喜博士は道教の道德に付いて十時半過より十一時五分頃迄講演を連続せられしに不幸にして余の頭各方面に発達せざる為ならん了解し難かりき午後は東京帝国大学対本校庭球部の演習競技ありしも結局は本校の負なりしも其实力に於ては互に伯仲せるを見たり夕食後柳原晨人君の下宿に至りしに君は昨日の決心（帰村せんとす）に少しく異状生じ更らに明朝にせんとせり依て余は帰舎せり時に七時頃なりき本日は八時頃電燈消え一時落胆せしも数時間の後再び点せり十時過臥床

三日晴天

六時起床、柳原晨人君を訪問して昨日の決定を実行せんと欲せしに不幸にも茲に再び故山の父（元教様）より封書に為替金拾円を送り来り

し為め眩惑せられて更に昨日の決定を変更せんと欲せしに午前十時頃いよ／＼帰村せんと決定せりと告げたり依て金参円（汽車賃）を与へ□父より来りし為替金及印は都合により余が預かりて分れたり午後は京都大学対東京大学庭球競技を見物と出掛けしも東京方は我強チームを敗りたる豪のものなれば其勝負も予め定まりきと思ひしも最初の内は案外好成績なりしも中途より京都軍は大に攻撃せられ終に優退三組に不戦者一組をのこして東京方の勝利となりぬ時に四時半なりき

夕食は横井君と共に寺町、円山公園を散歩して帰舎せり最早祇園の梅は二分通迄開花しカゞりも点してありき思ひに両三日間には満開となるならん此散歩の中途靴を柏原に依頼して帰れり九時半臥床

#### 四日雨天

六時起床本日は四高対野球競技の仕合あるべき筈なりしに床を蹴りし時より雨は凄々として降り余の落胆如何計ぞや剩へ午後に到りては殊の外甚だしく夜に入りても猶止まず、八時よりは南舎の残員集合して茶話会を開き直に胸襟を開き笑談終に午後十時四十分になりて散会せり本日浅沼君来りて寄宿にあり其由を聞くに本田君病気の為め止むなく其後任者を撰ばざるべからずとて明比君に依頼せしも氏は頑として自信を守りて諾せず止なく去つて田村君に向ひぬ嗚呼はたして承諾せるや否や十一時臥床〔卯二、〕

#### 五日雨天

六時前起床、本日午前十時半より六高対三高の剣道仕合ありしもさすがは申込み来りし六高だけありてかの副将は我大將、副将及一人を見事打敗りて目出度勝利を得たり只返へす／＼も残念なるは御大將の出陣なきことなりかくの仕合終結せしは午前貳時頃なりき然れども凄じき雨は猶止まず十一時臥床の時も盛に降り続けたり昨日の庭球（四高対三高）も疑しきこと限

りなし

#### 六日晴天

昨夜の轟々たる大雨に疑ひの眸を開けば声否音あるか如くにして音なしいよ／＼六時床を蹴つて戸外に出づれば天は一面に掻き曇れども雨は降り居らず只雲の行足南方に向ひしを以て楽感して朝食をおへ午前の仕合なる庭球を見んとて校庭に出づれば雨天後のことゝの理由の下に此仕合を中止せんことを六高方より申込み止むなく仕合を中止せり午後三時よりいよ／＼四高対の野球仕合ありしかもかれ等の弥次隊は全備せるも悲い哉撰手は未だ堂に入らずと見え一対八（+α）の結果を以て本校の勝となりしのみか其一は本校の一寸の失錯なりきかく其技の差雲泥なりしかば弥次の元氣も失せたり終結せしは午後四時半なりき夕食後志村君と共に寺町より円山に散歩を試みぬ今や祇園樓も隆盛を極め京都の運動と共に京都の春を飾るものなり帰舎せしは八時なりき本日其由を浅田一君に通知す且本日故山より書留及封書を得直ちに吉田郵便局に至りて金子も受取れり依て其返事を葉書にて差出せり臥床十時、本日故山よりの手紙により呉市八木清太郎様に近火御見舞甘を差出せり

#### 七日晴天

六時前起床、午前九時半より四高対三高の庭球仕合ありて午後一時半散会す此仕合に於て縱令我軍の副将沢崎は病気の為め出□せざりしも優退参をのこして吾校の勝利となりぬ午後二時半頃より吾運動場に於て四高対七高の野球仕合ありしも相変らず四高の敗にて終わり時に三時半なりき

0対5

夕食後寺町散歩し靴修繕をなしたる為め柏原に立寄りて帰舎し十一時臥床す、本日夕方浅田君より昨日の返書受取れり本日更らに故山より（但木本先生よりならん）書留来る〔二卯〕

八日晴天午後二時頃より降雨、

六時前起床、午前九時過六高対三高庭球仕合を挙行せり初め本校軍に振はずして続けて三組の優退を出せり然れども最後に勝田、田中組出ざるや見事に敵軍の七組と猛戦して薙ぎ倒し拍手の裡に月桂冠を得て仕合を終結せり、時に午後二時なりきそれより一高対三高野球仕合を開始せしも僅か一回にて降雨の爲め順延せり夕食後少時勉強して後頼君を訪問して九時帰舎し十時臥床本日浅田君帰る（夜）

九日 朝一寸降雨ありしのみ

六時起床、登校せしも課業は全く休みなりき午後二時より一高対三高の野球仕合ありとて余等は一時頃運動場に集合せしも中途千秋君のポンプの悪戯には一日大に閉口せり仕合はいよ／＼三時に開始せり五六回に到るまでは共に零なりしも六回目に至りて敵軍の一挙三点を得我軍得る所なし漸くにして七回目に一点を得しも敵の投手戸田の魔球に脳殺せられ盛んに三振をなし終に九回に至るまで得点なく一対二（ $+\alpha$ ）にて我軍の敗に期せり我軍よく戦ひしも敵は健なるもの終に昨年の報復讐を受けたるなり然れども我軍の撰手等は多々暗涙を落せしを見しときは同情の感簇出して胸の苦痛甚だしかりき時に四時なりき帰舎後湯を沐して夕食し柳原君を訪問せしも居まさす直ちに帰舎して勉強し午後十時半臥床す

十日 晴天

六時起床、本日も全課休講にして庭球をこれことして午後三時よりは第六高等学校対三高の野球仕合をなせしも結局三（ $+\alpha$ ）対零にて本校の勝利に期す時に四時頃なりきそれより疏水に船を浮べて帰舎後直ちに議事堂に慶応義塾講演会を開き最後に鎌田栄吉君の演説（学校の独立）を傍聴して帰舎せり時に午後十一時なりき

十一日 半雨天

七時起床、夜具を蹴つて階下に降れば細雨霧の如く面をかすめいささか魂胆を煩らはせしも

朝食後は空模様好都合となりしかば居合せたる本田及び村上の両君と共に大津を指して突進せり然るに山科に取掛りしとき亦もや細雨来りて余を驚かしぬ、最ともここ迄来りしものなれば今に至りて如何ともしがたく逢坂山の小関峠にありしときは幸にも降雨何処へやら影を隠しぬ、大津松坂屋に達せしは早や午前十一時に垂んとす、それより弥次旗を作りて競漕場に至りたりしとき将に第貳回を挙行せんとせし所なりき第四回には余も出漕せしも其甲斐なく恨を飲んで退きぬ午後五時と云ふに□々たる細雨に凄然と各部の撰手は青赤白の順次に小蒸気船にひかれて出発点へと急ぎぬ、銃声一発一斜千里の勢にて進み来りし三艇中、白、赤、青の順と見られたり然るにバックモアの処より赤は猛然白を抜き僅か半艇身の差を以て赤の勝利となりぬ要せし時間は五分九秒半即ち昨年の之れに遅るゝこと四秒半なりき拍手万歳声祝に送られて松坂屋にと進み万歳を三唱して後茶菓の饗応を受けて疏水の船により帰舎に付きぬ、吉田町にて露店に入りて夕食の代用をなして帰舎せしは十時前十分なりき十一時臥床聞説本日七高対三高の野球仕合は七対二にて本校の勝利に期せりと本日故山より封書を得先日の為替に付き尋問ありたり〔昼夕欠〕

十二日雨天

六時半起床、総長より降りみ降らずみ定まりなき今日の空模様で大学の短艇競漕会も思ひやられて哀れなり晴天なれば嵐山の花見もこよなく楽しからんも雨天ならば行く元氣もなく午後市会議事堂の見真大師の六百五十回忌の講演会ありしを幸い浅田君と共に0時半舎を出発して会場に向ひぬ、本日の弁士は

開会の辞

吾人の主張 森川智徳

氏は風采よき顔容に八字鬚美しく壇上に立ちて此回忌の真宗の回復期ありと称へ滔々と論し

去り論し来り特に例を耶蘇教に取り更らに外国  
貿易商なる福間久米蔵氏の仏教に入られし由を  
説き最後に耶蘇教の僧侶の数（日本に於ける）  
及信者数の卅六年度の統計表を示して降壇せる

日本仏教の三時期 山内晋卿

例によりて例のごとき快弁を振ひ聴者をして  
時の移るも知らしめずして一時間に渡る長演説  
をこゝろみらる

本願寺の聖人 蘭田宗恵

見真大師自身は愚禿と名けらるゝに吾人叫ん  
て大師と云は無順（マツ）するか如きも其実は然らずと  
て細々と其理由を説明らる

見真大師の慧眼 島地黙雷

今上天皇の見真大師と名称を下し給ひしは大  
無量授経内の慧眼見真たる句を取られしならん  
と悍（マツ）に云はれ滔々豎板に水を流すが如き雄弁  
を振はれしも悲むは余等の如き凡人には其引か  
れし御経の字句を解する能はざる為め空しく無  
意味に終れり抑も氏は白髪（マツ）のほう髪（マツ）を飾られ頂  
は丸々と剃られ一見其名僧たるを思はしむ

これにて本日の会は終りを告げり時に四時廿  
分なりき此とき感じたるは讚美を女の小供（日  
曜学校生徒）に唱へさせしことなり之れ耶蘇教  
にかんがみ改良せしところならんも余より見れ  
ば却て怪しく見られたり、帰舎せしは五時なり  
き直ちに湯に入りて夕食をなして机によりしも  
寢魔来りて余を襲ふこと限りなし依て中休みと  
ミルクホールに至りて更らに勉強をつゞけ十一  
時臥床す、時に雨盛ん降り（マツ）を耳にしぬ、〔昼代  
肉、〕

十三日 雨天午後三時頃より晴天

六時起床、本日よりはよい〜授業ありと登  
校すれば完全に授業せしものは一つもなく就中  
体操及大井、伊藤の両先生は休みとなりぬ、依  
て午後には自脩室及館内に入りて読書に余念な  
かりき扱テ本日柳原農人君通知あり曰く受験者五  
百廿八人中首席にて入学せりと嗚呼多年の辛苦

今や其初顕れしかと大に悦びぬ唯余のみは可も  
なく不可もなく碌々消光するのみ大に慎まざる  
べからず午後授業料を納めしと共に故山に葉書  
を以て先日の為替受取通知をなせり本日は都合  
により散歩を中止して机に倚りしも両眼接近せ  
んと欲して余を苦むること限りなし、十時臥床  
〔卵、夕欠、〕

十四日晴天

五時半起床、感ずる所ありて水浴を開始す願  
はくは連続せんことを、午後化実を二時半にす  
まして一中対慶応の野球仕合を見物し三時過辞  
し帰りて湯に入り机により五時半に至りて夕食  
し寺町地方散歩の後帰舎し十時臥床、〔卵〕

十五日 雨天 午後晴天

六時半起床、大井先生及体操休み、抑も昨晚  
以来寒さ甚だしく本日の如きハ身振ひして□冬  
のそれかと疑はん計なりき夕食後円山公園を音  
づれしも悲い哉爛漫なる梅花の最後も英雄の之  
れの如く紛々たる落花は路上を蓋ふて其惨憺た  
る同情するに残あり帰舎して午後五時より本学  
期第一の茶談会を開始し雑談数刻十一時に垂ん  
とす散りて戸外を眺むれば祇園の梅は散りたれ  
ども月は皓々として日昼を欺くか如く

十六日 晴天

六時起床、大井先生休講なりしかば浅田君と  
共に歩を真如堂に運びては立皮梅（マツ）の中ば散りた  
る風雅を賞し黒谷に入りては卒塔婆の果敢なき  
を語り更らに大極殿の宏大と爛漫たる梅花に恍  
惚たること数刻帰れば猶未だ時早し依て図書館  
に入りて大日本地名辞書を翻きぬ、午後入浴中  
面会人ありとの報に接し、かば直ちに浴をすま  
して応接所に至れば柳原農人君来りり君か此度  
の成效（マツ）を祝し数刻の後分れて約する夕方寺町地  
方の散歩を以てす、夕食後共に寺町より円山公  
園に出でしに謀らすも見真大師の御遠忌の道路  
伝導（道）をなしつゝあるに遇合しぬ嗚呼悲む哉仏教  
も耶蘇教嗅くなりしにあらざるや十一時臥床、

〔本日の散歩中寺町にて忠海中学出身の平山君に合ふ氏は医専御入学の由、承れば藤代某君も御入学の由〕

十七日晴天

六時起床、午後物理実験は休みたり否休みなりしならん午後四時大学教授松本博士の論次講義を傍聴せんとて舎を出でしに忌中とやらにて先生休講の由を承り直ちに帰りて浅田君と共に松が崎の梅花を探り黄昏六時半帰舎せり十一時臥床、〔卯〕

十八日晴天

六時起床、大井先生は一寸挨拶のみにて休みとなりしかは浅田、増田の両氏と共に吉田山に散歩を試み体操時間は身体検査の爲め休みなりしかは庭球に時を費せり午後一時半迄仏語教授、三時頃より慶応普通部対本校野球練習試合ありしも結局十二点对五点对にて本校の負となりぬ夕食後は運動場にてフートを蹴りて七時暗になりて中止し机によりて十一時半臥床す〔豆〕

十九日晴天

六時起床、八時半浅田、志村、横井の三氏と共に或ものは赤靴、他のものは黒靴を穿ち剩へ

和服に下駄を備へたる志村君に対しては余は草靴脚絆の軽装にて大津街道を進み山科にて途を南方田舎道に回りて大石良雄の旧跡なる岩屋寺に詣て、そゞろに古のしのばれ殊に其四十七氏の位牌を配置せる一堂宇を拝せしときの如きは一種異様の感に打たれぬそれより梅花を以て名あるのみか或宗派の本山として只其庭園の美なる醍醐寺に詣でも悲い哉花は既に大部分泥土と化したりき只女学生の其樹間に面白く楽しく戯れたるは無邪気にして好かりしが一方にて女と相対して酌せし紳士も普通の紳士の如く酔ひはてし乱暴するに比すれば一種の□□酒を傾むくるの風雅なきにしもあらさき此寺に来る迄に坂上田村麻呂の墓地に立寄り之れより道を田畑の間より山道に向ひ伏見に出で帰舎せしは四時廿分なりき沐浴して夕食し午後八時より昨日の入舎なる戸倉君の入舎祝の茶話会を開き午後十時臥床す抑も本朝とやら電燈会社火災起こり爲めに本晩より寄宿舎で其影響を蒙り向ふ一週間点火せずとやらにて孤燈暗く一室を輝すのみ、〔卯〕

〔完〕